

## CONTENTS

- 第23回研究大会のご案内----- (1) 会費納入と領収書発行についてのお願い----- (4)  
新規入会員(2017年11月～2018年4月)- (4) 会告:会員資格について----- (4)

### 第23回研究大会のご案内

今年度の研究大会は、2018年6月16日(土)・17日(日)の両日、国士舘大学世田谷キャンパスを会場として開催されます。

16日は、韓相一氏(九州大学大学院生)、武藤優氏(九州大学韓国研究センター学術協力研究員)、前川友太氏(駒澤大学大学院生)、渡辺千尋氏(日本学術振興会特別研究員)、エドワード・パールィシェフ氏(筑波大学)、神長英輔氏(新潟国際情報大学)の6氏による自由論題報告をおこないます。午後からは、歴史資料セッション「歴史資料としての写真—『写真』からアーカイブズへの模索—」を開催します。長谷川怜氏(愛知大学客員研究員)、長佐古美奈子氏(学習院大学)、葦名ふみ氏(国立国会図書館)の3氏のご報告をいただき、総合討論を実施いたします。また、セッション終了後には、総会及び懇親会も予定されております。

17日は、張天恩氏(早稲田大学大学院生)の自由論題報告に引き続いて、「変動する東アジア世界のなかの明治維新—『適応と挑戦』の相互力学からの再検証—」と題した大会シンポジウムを開催いたします。まず、高江洲昌哉氏(神奈川大学)から問題提起をいただいた後、午前中に岡部敏和氏(中央大学)、醍醐龍馬氏(小樽商科大学)からご報告をいただきます。昼食休憩を挟んで、午後からは鈴木悠氏(サントリー文化財団フェロー)、森万佑子氏(東京女子大学)、青山治世氏(亜細亜大学)からご報告をいただいた後、横山伊徳氏(東京大学)、勝田政治氏(国士舘大学)からコメントをいただきます。その後高江洲昌哉氏、西澤美穂子氏(専修大学)の司会の下、全体討論をおこないます。

以下に歴史資料セッションと大会シンポジウムの開催趣意文を掲載いたします。会員の皆様方には、ふるってご参加いただきますようお願いいたします。

なお、研究大会に関する詳細は学会ホームページをご参照ください。

### 歴史資料セッション趣旨文

#### 「歴史資料としての写真—『写真』からアーカイブズへの模索—」

人物や風景、風俗、事件現場など、人間社会や自然現象を眼に映ったままの姿で記録化して留めたいという欲求は、長い歴史の流れの中で絵画のかたちで数多く今日に伝えられてきています。一方、19世紀に入ると、この絵画による方法とは別に、写真の発明によって記録化の新たな道りが始まりました。それは、レンズを通じて光が作り出す像をいつでも見ることの出来る状態に画像として定着させる技術の革新でした。この技術は、銀メ

ツキを施した銅板に酸化銀の像を定着させるダゲレオタイプの写真技術として、1839年フランス人ルイ・ジャック・マンデ・ダゲールにより本格的な歩みを始め、さらにガラス乾板と印画紙の発明により、写真技術は瞬く間に世界へと広がり、欧米のみならず、日本、アフリカ、アジアなど世界各地の文物や自然現象等が写真画像となって、今日に伝えられています。こうした写真資料については、技術史の研究のほか、被写体となっているのは何か、誰かという同定を中心とした写真史の研究が進められていますが、文書を主とする歴史学研究にあっては補助的な位置づけだったことは否定出来ません。しかし近年、写真資料の発掘と相まって、写真資料自体を記録資料として捉えようとする写真史研究の取り組みが模索されています。

今年度の歴史資料セッションは、こうした写真史の動向を踏まえて、今日までの写真資料の取り扱い方、伝えられ方を検証しつつ、次の世代へアーカイブズとしての伝え方を模索することを目的に、三報告を準備しました。

第一報告：長谷川怜氏（愛知大学国際問題研究所客員研究員）

「歴史学から“写真学”へー写真資料の活用にむけてー」

第二報告：長佐古美奈子氏（学習院大学史料館学芸員）

「学習院に残る教材写真ー白鳥庫吉の収集理由を探るー」

第三報告：葦名ふみ氏（国立国会図書館司書）

「写真記録の可能性ー対話の前提を整えるためにー」

伝えられてきた多数の写真資料の調査と整理の実績をもつ長谷川氏からは、歴史を写真資料からアプローチするという“写真学”の試みについて、長佐古氏からは白鳥の収集した朝鮮関係の写真資料を中心に写真資料群の収集理由と内容などについて、葦名氏には歴史資料としての写真資料のアーカイブズ化の可能性とその課題について、それぞれ報告を戴きます。

今回の歴史資料セッションが、写真を歴史資料としてどう考え、アーカイブズ化へどのように向き合っていくかを考える機会になることを期待します。

## 大会シンポジウム 「変動する東アジア世界のなかの明治維新 —『適応と挑戦』の相互力学からの再検証—」

明治維新と呼ばれる時期の日本の対外政策は「万国対峙」という言葉が象徴的に示すように、領土を画定し条約改正に取り組むことなどを国家目標としていた。

もちろん、かかる事実とそれに基づく歴史像をめぐって、明治維新100周年が祝われた頃を想起すればわかるように、「独立」の方に重点を置いた“成功物語”と、その後の植民地獲得に重点を置いた“侵略物語”というように対立的な見解との間で論争が生じたこともあった。このように、論争を通して歴史理解を深めていくことも可能であるが、明治維新150年を迎える今日、日本の行動を、日本以外の視座から考え直すという“複眼的理解”というアプローチも有効だと思われる。

こうした明治維新という自国史物語の相対化を考えた場合、濱下武志・茂木敏夫氏らの研究による東アジア像の更新は参照すべき枠組みである。彼らの研究は、伝統秩序がもっていた論理構造やその“強さ”などに注目するもので、それがいかに近代への転換期に影

響しているのかを明らかにするものであった。このように、既存の分析枠組みを問い直す研究の蓄積によって、東アジアをめぐる国際関係史もヨーロッパ中心の視座からアジアを主軸にした視座で考察することが可能となり、近代—伝統の二分法も再考され、“客体としてのアジア”から“主体としてのアジア”を考えるようになった。そして、アジア各地域の「近代的再編」に対する視座の更新も一定の市民権を得るまでになり、当時の日本を取り巻く環境理解も格段に深まってきた。

かかる研究状況を踏まえ、東アジア近代史学会のこれまでの活動を振り返ってみたい。発足直後の大会企画には「万国公法の受容」のように（西洋）近代への適応に重点を置いたテーマを掲げていた（1998年、1999年）。その後、「東アジアの国際秩序と条約体制」（2009年）では「不平等条約体制」と呼ばれる“自明の前提”を再考する試みをおこない、東アジアに即した近代の姿を分析するようになった。また前近代の多層的な境界から近代の排他的な国境線へと変化していく過程を考察しようと、「国境の多層性と明瞭化」（2012年）や『『境界』認識の変容と活用』（2013年）と、国境の画定という明治初年の外交において重要な課題を相対化する試みも企画してきた。さらに2015年のシンポジウムは、『冊封・朝貢』体制再考—近代東アジアの国際秩序をめぐる外交と言説』をテーマとして、東アジア近代史像の構築と更新に努めてきた。

以上のような成果と取り組みを踏まえて、今回の明治維新に関するシンポジウムを設定することにした。明治初期外交の特徴を考えると、日本の対欧米交渉を万国公法の論理への「適応」という側面、もう一方の対清・対朝鮮交渉は伝統秩序への「挑戦」という側面との2つの行動パターンで捉えることができよう。こうした「適応と挑戦」の特質を解明するためには、明治政府の外交を規定した要因と、明治政府のとった新しい外交政策による国際環境の変化という相互力学にも配慮したアプローチが必要になってくる。

本シンポジウムでは、まず国内問題と国外問題の連結点になる琉球を事例に、（1）岡部敏和氏が、「琉球処分」で琉球を「内国化」した明治政府が王国末期に締結した条約をどのように継承したのかに注目することで、琉球王国の条約が明治政府の欧米との交渉や日中問題にどのような影響を与えたのかについて報告する。次に「適応と挑戦」の両面を有するロシアとの国境交渉を切り口に、（2）醍醐龍馬氏が、樺太・千島交換条約前後の日露関係を踏まえて、北方社会の変容だけでなく、ロシア政府が幕府外交と明治政府の外交をどのように評価していたのかを報告する。また「適応」に関しては、（3）鈴木悠氏が巨文島事件を中心にイギリスの東アジア評価を踏まえた報告をする。イギリスから見ると日本はイギリスへ条約改正を求める国でもありながら、もう一方で中国・朝鮮問題では変容を促す当事国でもあった。次に伝統秩序への「挑戦」に関して、（4）森万佑子氏が、朝清関係にも考慮して日朝関係を朝鮮政府の立場から明治政府との交渉を検討する。最後に（5）青山治世氏が、日清修好条規の締結交渉、台湾出兵問題、「琉球処分」問題といった明治維新後の日本の対清外交を受けて、清がいかにそれを理解し対応していったかについて報告する。

本シンポジウムでは、二国間外交を列挙した面が強いが、これらを集積させることで総体としての東アジア世界（または、東アジア世界の中の日本）の多層的で動的な変化を描く議論をしていきたいと考えている。

大会シンポジウム実行委員会

---

## 新規入会員（2017年11月～2018年4月）

下記の方の入会申請を理事会で承認しました（順不同、敬称略）。

武藤優（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程）、齊藤紅葉（京都大学法学研究科研修員）、野浪雄貴（高崎経済大学大学院経済経営研究科博士後期課程）

---

## 会費納入と領収書発行についてのお願い

会員の方で、会費未納の方は、機関誌刊行や会の運営上支障を来しますので、すみやかにご納入をお願い致します。大学事務を通じて納入（国立大学などでの公費支払）される場合に、納入者が不明な場合が生じておりますので、ご面倒ですが納入の際にご一報ください。本会では、事務手続きの簡略化と経費節減のため、会費が振り込まれましたゆうちょ銀行（郵便局）、その他金融機関で発行する受領証をもって本会の領収書とさせていただいております。年会費は5000円（大学院生・留学生は3000円）です。下記の口座にお振り込みください。会員の方で、会費未納の方は、機関誌刊行や会の運営上支障を来しますので、すみやかにご納入をお願い致します。

郵便振替口座 口座番号 00180-6-580867 口座名 東アジア近代史学会

ゆうちょ銀行：金融機関コード 9900 店番号 019 店名〇一九支店

預金種目：当座 口座番号：0580867 受取人名 ヒガシアジアキンダイシガツカイ

※所属大学の事務室を通してふりこまれる方は、個人名が不明の場合がありますので、お名前をメールでお伝えいただければ幸いです。

---

## 会告：会員資格について

4月常任理事会で、3月末日をもって会費3年度分未納者の退会承認を行いました。

---

## 機関誌『東アジア近代史』個人論文募集のご案内

当学会機関誌『東アジア近代史』第23号（2019年6月刊行予定）に掲載する個人論文を募集しています。ふるってご投稿ください。なお、投稿期限は2018年10月末日、投稿先および問い合わせ先は東アジア近代史学会事務局（奥付参照）となっております。

〔編集後記〕

今号は、6月に開催されます研究大会のご案内が中心となっております。細目は同封の案内状をご覧ください。

「東アジア近代史学会会報」第44号 2018年4月30日

発行 東アジア近代史学会 会長 檜山 幸夫

編集 東アジア近代史学会ニューズレター編集委員会

東アジア近代史学会事務局 〒277-8686 千葉県柏市光ヶ丘2-1-1 麗澤大学 櫻井研究室内

E-mail アドレス modern\_east\_asia\_jm@hotmail.co.jp URL <http://www.jameah.gr.jp/>